



# 双塔

カトリック新潟教会

2016年2月  
No. 333

## まず主を仰ぎ見て、光を受けよう

助任司祭 ナジ・エデルベルトゥス

二月に行われる伝統行事を見ると、『渡る世間は鬼ばかり』というドラマを思い出します。題名だけ覚えていますが、内容はあまり分かりません。ただ、豆蒔き（2月3日）や「やいかがし」（2月2日）について読む時に思い出されるものですね。もちろん鬼の影響を受けた人もいますが、鬼は神に勝ち目がないので、神の恵みを頂いて人々に便宜を図る人のことを思い出しましょう。針を持って防寒に役立つ服を作る人が沢山いると思います（関東の針供養は2月8日）。彼らによって 神からの助けが届けられるのではないかと思います。

マリア様も与えられた色々な物を大切に、神様に感謝を捧げられたと思います。イエス様がお生まれになって40日後、母としての使命に感謝し、レビ記12・6—7に定められた通りに 御自分を祭司に紹介し、神の神殿に与る人と再び自由に交際することが出来るようになりました。東方教会では2月の2日は妻たちの日とも云われます。マリア様はアンナを始め、多くの妻たちに歓迎され、イエス様を彼女達に紹介されました。残念ながらルカ福音書は女預言者の話を短く書きました。アンナは幼子について出会う人に語ったと（ルカ2・22—40）。とにかくマリア様の清めの日には女預言者も婦人達も沢山いて、シメオンの歌を聞きながら幼子を囲んだでしょう。

幼子イエス様はイスラエルの誉れ、諸国の光になるというシメオンの歌をテーマにし、祝う習慣は現代でも続いています。その記念の一つの特徴はロウソクの行列でした。輝くロウソクは闇の影を追い払う神聖な光で、全世界を永遠の光で満たすイエス様を表しています。そのミサの中で祝福されたロウソクを持って帰って、そのロウソクで十字架を形造り家に掛ける人がいる一方、心の闇を払うことができるように祈って、家庭祭壇に置く人もいます。

ロウソクはまた、長く素晴らしい愛を示し続けるイエス様の象徴でもあります。闇を追い払うために自分を無にする精神の力は日本にも及びます。先月19日に福者として列福が決まった戦国時代のキリシタン大名・高山右近（1552～1615年）はその輝きを見て、日本を後にしてもかまわないと覚悟されました。日本を出られた時、菅原道真と同じ気持ちで愛する人々にメッセージを送りながら去っていったかもしれません。2月の俳句に分類される菅原道真の歌は精神力のある人の歌です。自分が大変な状況にあっても、残っている力で他人を励まそうとする歌です。「梅よ、あるじのわたしがいなくとも、春を呼ぶ風が吹いたら、忘れずに咲くのだよ」と。小さくとも忘れずに光を放て、正義と平和のため祈りを続けよと、日本から離れた高山右近はイエス様と同じ願い（ルカ12・49）をされたと思います。



## そよかせ便り



### ■ 日中ミサ、新年の挨拶 ----- 1月1日（金）11:00 -----

「あけまして おめでとうございます！」ラウル神父様の満面の笑顔に、会衆も笑顔で「おめでとうございます！」

快晴の元旦。聖堂には和服姿に白いベールが目をつけた。神父様は、「聖家族」の日におじさんの帰天の連絡を受けたお話でお説教を始められ、聖エディット・シュタインのことばを引用（月刊1月号の巻頭言を参照）、心に沁みのお話に聖堂は水を打ったようであった。最後に「私たちが周りの人に、いつくしみとあわれみを持てるように祈りましょう」と結ばれた。ミサ後は、センター1Fで賀詞交換会が開かれ、ワインにカナッペや手作りのお漬物をつまみながら、お正月らしいひと時を過ごした♪

### ■ 洗礼志願者入門式（主の洗礼）----- 1月10日（日）-----

9時半のミサ中に、4名の洗礼志願者の入門式が行われた。式中、志願者は代母によって、耳、目、口、胸、肩に十字架のしるしを受けた後、司祭より主の祈りを授かった。

### ■ 一致祈禱会 カトリック新潟教会

----- 1月19日（日）10:30 -----

今季最大の寒波に見舞われた今年のキリスト教一致祈禱週間。それでも、当新潟教会で行われた祈禱会の間には薄日も差し込んだ。祈禱会には30名ほどが参加。ラウル神父様は礼拝の説教で「主はみなさんとともに。——またあなた（の霊）とともに」という、初代教会にその起源をもつ挨拶の言葉の意義を中心に話された。

## みんなの広場

### ミサの変更箇所



### 5つのポイント！！

- 1.アレルヤ唱は、「アレルヤ アレルヤ」のみ歌う。（唱句は聖歌隊）
- 2.福音朗読前に、司祭と一緒に額、口、胸に十字架のしるしをする。
- 3.パンとぶどう酒の奉納の時に会衆は着席。
- 4.奉献文の間は聖変化の時も含め起立。
- 5.「キリストによって、キリストとともに、…すべての誉れと栄光は世々にいたるまで」  
は司祭が歌い、会衆は「アーメン」のみ歌う。

